

誌 説

平成30年度臨床リウマチ投稿論文を振り返る

松野リウマチ整形外科
日本臨床リウマチ学会雑誌編集委員会委員長
松 野 博 明

は じ め に

平成30年度も雑誌臨床リウマチには多数の有意義な論文が寄せられました。編集委員会委員長として投稿してくださった先生方には心より御礼申し上げるとともに、今後も本誌の地位向上のため引き続き玉稿の寄稿を続けて頂けるようお願いしたく思います。またご多忙の中、投稿論文を査読してくださった編集委員会の先生方をはじめ、その他多くの査読いただいた先生方におかれましては本当に有り難うございました。お蔭様で紙面に価値ある論文を多数掲載することが出来ました。

本誌には、誌説・総説・原著・誌上ワークショッピング・臨床症例報告と多岐にわたる特集があり、それぞれに国内で注目される内容が紙面を飾る構成になっています。また原稿の採否は査読後決定させていただいていますが、和文・欧文とも掲載可能な雑誌として今後も先生方のお役に立ちたいと考えています。

現在、本誌は投稿された論文の中から年に数編の優秀論文賞を選定させて顶いており、受賞された先生には翌年の臨床リウマチ学会での表彰式への参加のお願いと寸志の贈呈を行っています。本年も卓越した2編の論文が選定されました。今回はこの2編の論文内容について簡単にご紹介させていただくとともに、他の注目される寄稿論文について触れさせて頂こうと思います。

平成30年度優秀論文賞受賞論文

坪井洋人先生の論文；IgG4関連疾患の病因一分子生物学的アプローチ(臨床リウマチ29(2), 128-139, 2017)ではDNAマイクロアレイを用いた遺伝子解析からIgG4関連疾患とシェーグレン症候群では遺伝子発現パターンが異なることが示されました。またこの2疾患における口唇唾液腺標本の検討から両疾患ではタンパクレベルでの発現が異なり、IgG4関連疾患ではchemokine (C-C motif) ligand 18 (CCL18) とlactotransferrinが病態形成に重要であることを証明され優秀論文に選ばれました。

吉原良祐先生の論文；メトトレキサート関連リンパ増殖性疾患27症例の臨床像(臨床リウマチ29(3), 164-172, 2017)では豊富な臨床例の解析からMTX-LPDの増加にはMTXの使用量とEBウイルスの感染が重要であり、発症時には可溶性IL-2Rが陽性となるが、この値が高いほど病期が進行しており、sIL-2Rはその後の予後予測因子となりうることを示され、臨床試験として意義のある報告として優秀論文賞に選ばれました。

以上2編が平成30年度の優秀論文賞受賞論文であります。平成30年度にはこの他にも注目すべき多くの論文が掲載されており、その一部を紹介させていただきます。

Contribution article of the journal of clinical rheumatology and related research clinical rheumatism in 2018
Hiroaki Matsuno.

Matsuno Clinic for rheumatic diseases

Editorial Committee Chairman of the journal of clinical rheumatology and related research

DOI: 10.14961/cra.31.1

平成30年度その他の注目すべき論文

第1巻に報告された気管支炎の治療経過中に発症したcrowned dens syndromeの1例(臨床リウマチ29(1), 52-58, 2017)は偽痛風の1亜型であるCDSの診断から治療までを詳細に記載した内容であり、日常しばしば遭遇する診断に難渋する原因不明の炎症性多関節炎の鑑別に本症も念頭におくべきであることを注意喚起した論文であると思われます。

第2巻には誌上ワークショップとして受賞論文以外にもIgG4関連疾患の2論文が掲載され、IgG4関連疾患に対する治療：前方視的臨床研究を中心に(臨床リウマチ29(2), 140-146, 2017)数多い臨床例の解析からIgG4関連疾患ではほとんどが初期のステロイド療法が奏功することを示され、今後の本症の治療指針に重要な一石を投じた報告と思われました。またIgG4関連涙腺・唾液腺炎(ミクリッツ病)の診断とトピックス(臨床リウマチ29(2), 147-154, 2017)は、本症と悪性リンパ腫を含めた鑑別診断の重要性を示されたことから臨床的意義の高い論文であると感じられました。

第3巻では著明な炎症高値を呈しステロイド療法が奏功したRosai-Dorfman病の1例が報告されました(臨床リウマチ29(3), 197-204, 2017)。本症は原因不明の非腫瘍性組織球増殖性疾患であり、鑑別を要する疾患として頭蓋内脳実質外腫瘍である髄膜腫、ランゲルハンス組織球症、Hodgkinリンパ腫などが上げられますが、この論文ではIgG4関連疾患との異同を詳細に検討されており、興味深いものになっていると思われます。また脊椎関節炎における脊椎病変の手術治療(臨床リウマチ29(3), 211-215, 2017)では本症における手術適応としての前方注視障害と手術術式を紹介された点が今後の診療に役立つ有意義なものであると思われます。

第4巻で報告されたリウマチ膠原病診療における感染症マネージメント(臨床リウマチ29(4), 292-299, 2017)は、近年結核より罹患率が増加している非結核性抗酸菌症の診断と治療について詳細に報告され、リウマチ医として合併

症である本症に対する考え方をレビューいただいた点で注目に値する論文と考えられます。

その他の論文について

今回紹介させていただいた論文以外にも臨床リウマチ学会誌には、貴重な数多くの論文が掲載されており(紙面の都合で全部を紹介出来ないことは残念です)、とりわけ日本を代表するリウマチ学の権威ある先生方よりご寄稿頂いた誌説や総説は、示唆に富んだ読み物としても興味深い内容になっています。先生方には今後も本誌に対するご協力をお願いする次第であります。

最後に平成30年度の投稿論文をタイトルのみ紹介させて頂きたく思い本稿をしめたいと思います。

平成30年度臨床リウマチ投稿論文

(著者は筆頭著者のみ・敬称所属略)

- 田中良哉：日本のリウマチ学が世界に評価されつづけるには
- 田守昭博：肝臓内科医のできるリウマチ診療へのサポート
- Daisuke Kobayashi: Effectiveness of infliximab for rheumatoid arthritis with dose escalation and shortened dosing interval
- 磯野正晶：関節リウマチにおける生物学的製剤の長期継続率および治療効果への糖尿病の影響
- 安野翔平：関節リウマチにおける骨粗鬆症治療介入は疾患活動性・グルココルチコイド使用を凌駕する
- 竹本美由紀：フットケアを要した関節リウマチ患者の足病変の定量化の試みと背景因子との関連
- 小中八郎：トシリズマブにより肉眼的血尿が改善したAAアミロイドーシス膀胱病変を伴う成人期若年性特発性関節炎の一例
- 岡田晃典：気管支炎の治療経過中に発症したCrowned dens syndromeの一例
- 伊藤 聰：院内連携によるチーム医療(1)

- 医師の立場から
10. 村松春菜：院内連携によるチーム医療(2)
看護師の立場から
 11. 川口 浩：ロコモティブシンドロームの迷走
 12. 大谷恒史：NSAID起因性小腸傷害の現状と対策
 13. 伊藤 聰：新潟県立リウマチセンターにおける医療連携について
 14. 井上拓也：関節リウマチ発症を契機にプロテインC欠損症に伴う肺梗塞を発症した1例
 15. 三浦貴徳：関節リウマチ治療中に炎症性腹部大動脈瘤を合併した1例
 16. Wibowo Tansri：全身性エリテマトーデスやANCA関連血管炎に類似した所見を呈した血液培養陰性の感染性心内膜炎の一例
 17. 阪下 晓：レイノー現象と末梢循環不全が主症状であった皮膚動脈炎の一例
 18. 坪井洋人：IgG4関連疾患の病因—分子生物学的アプローチ—
 19. 正木康史：IgG4関連疾患に対する治療：前方視的臨床研究を中心に
 20. 山本元久：IgG4関連涙腺・唾液腺炎(ミクリツツ病)の診療とトピックス
 21. 住田孝之：次世代の若手にリウマチ学研究を託す
 22. 西岡久寿樹：日本臨床リウマチ学の将来の展望～「辺境の医学」の魅惑と挑戦～
 23. 吉原良祐：メトトレキサート関連リンパ増殖性疾患27症例の臨床像
 24. 山田紗依子：当科データベースに基づいた関節リウマチに対する薬剤継続率の分析
 25. 田中晃代：メトトレキサートの副作用に対する関節リウマチ患者の理解度調査
 26. Satoshi Ito: The effect of iguratimod and switching from subcutaneous injection to intravenous injection of tocilizumab in a patient with rheumatoid arthritis
 27. 森 俊輔：著明な炎症高値を呈しステロイド療法が奏効したRosai-Dorfman病の1例
 28. 市川奈緒美：乾癥性関節炎の体軸関節病変について
 29. 米澤郁穂：脊椎関節炎における脊椎病変の手術治療
 30. 川上 純：講座における研究の継続性・伝統
 31. 東 直人：成人のシェーグレン症候群の特徴と治療
 32. 田中伸哉：新しい骨粗鬆症薬について
—2013年以降—
 33. Satoru Kodama: Efficacy and safety of etanercept in rheumatoid arthritis patients over 75 years of age
 34. 小林大介：皮下注生物学的製剤の注射時痛の比較～アダリムマブ0.4ml皮下注製剤の評価～
 35. 松下 功：リウマチ外来における医療クラークの重要性
 36. 前島圭佑：高齢発症の大型血管炎の3例
 37. 川上 純：リツキシマブ
 38. 松井 聖：関節リウマチ治療におけるアバタセプトの位置付け～ABROAD試験を中心～
 39. 横野茂樹：リウマチ診療における非結核性抗酸菌症のマネージメント